

浄土学專攻

浄土教の人間観

——信機信法における凡夫——

佐 藤 健

宗教における人間解明は、実存としての人間が「いかなるものであるか」を把握すると同時に、「いかに生きるべきか」という実践的行動につながるものでなくてはならない。

そこで信機信法といわれるところの信機とは、善導の観經疏散善義に、

一者決定深信自身現是罪惡生死凡夫、嗔却已來常没常流、無有出離之縁。

とあるように、出離の縁のない罪惡深重の凡夫たる自己である。

又信法とは、同じく善導の散善義に

二者決定深信彼阿弥陀仏四十八願、攝受衆生

無疑慮、乘彼願力、定得往生。

とある。つまり決定的に往生する自己を信ずることである。従つてこの信機信法という二種深信は全く相反し、対立する性格のものである。とうてい救われ難い自己が決定的に救われる自己なのである。これは明らかに自己矛盾である。

この対立する二者が、信機信法という信仰構造において、被救済者としての自己にいかに展開するかが問題である。この信機信法の二者は、お互に作用し合うことにより、ますますその距離をはなすのである。そして限界状況として「出離の縁なき」又は「決定往生」という自己の主體的把握にまで到達するのである。しかしこの自覚は常に人と仏との關係において成り立つものであり、単に自己一人が他者なくして、主體的に把握されるものではない。もし絶対なる他者なくして、単に自己一人が主體的に自己の有限性、凡夫性を自覚したとしても、それは眞の有限性、凡夫性の自覚とはいえないであろう。また眞の宗教的救済とはならないであろう。

従つて対象化された客体としての「自己」の罪を意識

することによつては「救い」はもたらされないのである。

「自己」が自己に否定的に対決することは、論理の世界では、即自的な自己が、対自的な自己の立場を通じて、即対自的な自己としての総合的な自己から復活するといふことが出来る。しかしこれは、一般論理の世界における救いであつて、実践の世界における「救い」ではない。

宗教自体の領域のみの観点からすれば、矛盾対立は統一の立場に向つて否定されるのであるが、それはまもなく懸えつて肯定されるのである。罪惡深重の人間を否定することは、定んで往生を得る人間をも否定することになる。信仰の場においては、善と惡、仏と凡夫との対立自体が問題なのでなく、このような対立を内在的に包蔵する主体たる人間が問題なのである。つまり、人間が決定的に救われないものであるか、又決定的に救われるものであるかが問題なのでなく、決定的に救われない人間が決定的に救われる人間であるという、その不思議に氣付くことが重要なのである。

浄土教における自己救済は、思弁的自己救済ではない。あくまで思弁を超えた宗教的救済である。即ち自己の罪

惡性の自覚は阿弥陀仏の本願の自覚において促れるのである。

この相反する自覚が同一自己において、自己救済を成立させるのが法然における称名念仏である。法然が護念經の奥書に「浄土宗安心起行の事。善なきを義とし、善なきを横とし、浅きは深きなり。只南無阿弥陀仏と申せば、十惡五逆も、三宝滅尽の時の衆生も、一期に一度善心なきものも、決定往生遂るなり。」とある。この中でも「善なきを義とする」として「只南無阿弥陀仏」と称名するという、この宗教的決断がなされるか、否かにかゝるものである。

したがつてこの宗教的決断のなされた称名念仏の場からいえば、その場は信機信法という両者が相反するものであるということが出来る。しかしそれでもつて浄土教の信仰構造としての信機信法が語られるということが、無意味なものとして捨て去られるということがあつてはならない。ここに宗教における論理の世界の限界が認められるのである。即ちその信機信法という論理的説明の世界の場を打ち破るところに、眞の称名念仏があり、ま

た浄土教でいう真の人間観が鮮明にされてくるといえるのではないか。

曇鸞大師の五念門釈

照崎 頌 正

善導による称名正行―正定業を中心とした五種正行の創設は、曇鸞の五念門釈にもとづくところ大なるものがある。今ここに、曇鸞の五念門釈が善導の五種正行へと移行し、純化する所以を考究してみようと思う。

善導大師の五種正行説は、その著『観無量寿経疏』第四散善義のなかに、

言正行者専依往生經行行者是名正行。何者是也。一心専読誦此觀經阿弥陀經無量寿經等。一心専注思想觀察憶念彼国二報莊嚴。若礼即一心専礼彼仏。若口称即一心専称彼仏。若讚歎供養即一心専讚歎供養是名為正。又就此正中復有二種。一者一心専念弥陀名

号行往坐臥不問時節久近念念不捨者是名正定之業。順彼仏願故。若依礼誦等即名為助業。

といつてゐる。この五種正行のものを特色を要約するならば次の三点をあげることが出来る。

先づ第一にこれら読誦、觀察、礼拝、称名、讚歎供養の五種正行はすべてこの土にあつて、阿弥陀仏の浄土に往生を願う者が実践する行である。第二に五種正行はいずれも阿弥陀仏及びその浄土にかかわりを持つという一点にしばられた行であり、阿弥陀仏等にかかわりをもたない行はすべて雑行としてしりぞけられていることが知られる。第三にはこれ五種の正行は五つの行が対等の関係において往生行となるのではなく、第四称名正行のみが往生行としての正定業であり、他の読誦以下の四つの正行は助業としてすべて称名正行に帰一するものであることが知られる。

このように善導の五種正行のもつ特色を三点にしばつて理解した私は、それらの三つの観点から曇鸞の五念門釈をながめることによつて、両者を比較しつつそこに純